

発行日 2007年2月20日(隔月20日発行) 通巻258号 1982年8月16日 第三種郵便物認可

日本国際ボランティアセンター 会報
トライアル・アンド・エラー(試行錯誤)

Trial & Error

No.258

March - April 2007



< 和気あいあいとしたインドの村人たち >

特集

自然を生かし、確かな 暮らしをつくる手法を学ぶ



Japan International Volunteer Center

特集

自然を生かし、確かな暮らしをつくる手法を学ぶ

インド、チャタジー氏の活動地にて

農業は奥が深く、村はしたたかだ。農業が成り立つ背後にはそれぞれの地域の自然・風土があり、それへの理解なしに農の営みなどではいけない。そこで生活する村人は、その自然と人々の歴史を背負い、生活の難題に直面しながら暮らしている。したたかであれば生きてはいけない。その村に「よそ者」として入って、いったい何ができるのか。試行錯誤と学びの日々を送る現場のスタッフが、その悩みをインドでわちあつた。(編集部)



なぜいま「チャタジー研修」か

ベトナム事務所代表 伊能まゆ



■プロフィール
大学卒業後、ベトナムに留学。その後日本に帰国。その後、ベトナムの大学院を経て、3年からはJVCに。農村の魅力に取りつかれ！ベトナム滞在は早十年になる。

■みんな悩んでいる

カンボジア、ラオス、ベトナムの村の現場で、JVCスタッフは悩んでいた。自分たちの活動が、そこに暮らす人々の生活にどこまで受け入れられ、浸透しているのか。今まで様々な活動や試行があったが、そのすべてが必ずしもうまくいったわけではない。

村人たちは、その村ごとにそれぞれの文脈のなかで生き、暮らしを営んでいる。そこに寄り添い、ともに活動する中で村人の暮らしに今まで以上に資するためには、現時点において、各活動の進め方、アプローチの仕方などのなかで見なおすべき部分があるのではないだろうか。現場でさまざまな模索が始まった。今から三、四年前である。インドを拠点に世界各地で村づくりに取り組んでいるチャタジー氏の考え方と手法を学ぶなかで、何かが見つかるかもしれない。

今回のインド研修は、スタッフのそんな思いから出発したものだ。

■研修のねらい

チャタジー氏の考えを一言で言えば、「持続的農業と自然資源管理を通じた食料確保と生計向上」となるだろう。今回の研修は、これが具体的にどのように実践されているかを自分たちの目で確かめ、それを各国現場の状況や文脈のなかで適用できるようにすることをねらった。

また、チャタジー氏が代表を務めるDRRSCのネットワーク構築とその活かし方について学びたいと考えた。チャタジー氏は社会福祉(Social Welfare)ではなく、社会正義(Social Justice)を目指して市民運動を展開している。「僕たちの活動はチャリティーではありません」と常に語るチャタジー氏。活動の対象は土地なし農民や少数民族といったインド社会の中で最も困難な状況におかれている人々である。こうした人々に単にモノやお金をあげるのではなく、どんな形で支援しているのか。他団体や政府機関等とどのように連携し、実証的な政策提言を行なっているのか。

具体的な実践例から学ぶことは、開発とグローバル化のなかで変わりゆくインドシナで新たな困難に直面している人々と共に活動を続けていく私たちにとって、とても大切なことである。

今回の研修には、私個人の思い入れもあった。農村開発プロジェクトを担当するスタッフは日本という先進国から派遣されている。私の場合、東京で生まれ育ち、農業はおろか、農村についても知らないことは多い。実際に村に入ると、村人から教わることでありである。

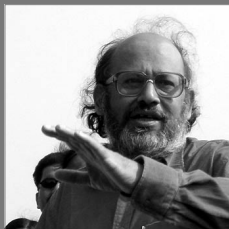
そんな私がベトナムの村人に貢献できることは何か。「よそ者」である私が関わる部分は何か。農業や農村開発について必要な知識と技術をいままで以上に身に付け、村人の生活改善に貢献できるようにすることと同時に、「よそ者」としての強みを活かして、村人自身が他の地域の人々と交流できるように基盤を造っていく。そのことを改めて確認したい、と考えた。

■チャタジー氏

(DRCSOC代表)

インド・アッサム地方出身。学生時代に難民キャンプやカルカッタのスラムでボランティアとして子どもたちのノンフォーマル教育や人権に関わる。その後、農村や日本の農業協同組合に関心を持つ。アジア学院で農業を学び、NGOなどで活動する傍ら、農村開発に有益な様々な知識と技術を学ぶ。

八二年にDRCSOCを設立。その後、講師やアドバイザーとして多くの団体に関わる。九四年から三年間、JVCカンボジア事務所でも農村開発や資料センターの創設に関してアドバイザーとして関わる。



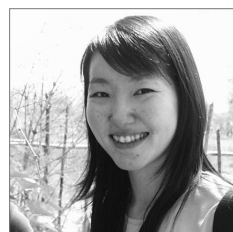
■DRCSOC

(Development Research Communication and Services Centre)

インド・西ベンガル州において、環境保全型農業と自然資源管理を通じて食料と生活の安定を図るための活動を実施している団体。

インドの村で見たこと

ラオス事務所
プロジェクトコーディネーター
新井 綾香



■プロフィール
大学時代に参加したカ
ンボジアへのスタディ
ツアーをきっかけに国際
協力に関心を持つ。大学
を卒業後、他NGOへ就
職。〇五年五月からJVC
でラオスに赴任。

■自然が「先生」

乾季ということもあり、訪問した多くの村では女性たちが家庭菜園を実践していた。村はまだ電気もなく、また森林も枯渇しており、現金収入になるような林産物を得ることも難しい。村人の家庭菜園は家の周辺にあるスペース、空間を最大限利用して行なわれていた。最も規模の小さい人は畳四畳くらいのスペースであり、土質も恵まれているとは決して言えないが、驚くことにほと

いうよりは、家庭菜園は乾季だけの活動となる。

DRCSOCの支援方法は、一言で言うと「村人が身近にある自然を学び、その自然の摂理を自らの農業に利用する」ということができる。

従って、農業技術的な支援というよりは、村人と共に自然の変化や植物の持っている特徴を学ぶことが中心になる。例えば、家庭菜園もただ単純に多くの種類を植えているのではなく、①収穫時期(どの時期にどの野菜の収穫があり、そしていつまでなのか)、②現金収入の可能性(現金収入になる可能性のある作物と、そうでないが多目的に使用できる作物をどの割合で作ると一番村人にとって「利」があるのか)、③栄養(どの時期にも必要なビタミンが確保できるよう考慮)、④種の採取保存が容易か、⑤耐乾性・耐虫性、といったように様々な要素を分析し、村人自身が自分たちの畑に植える作物を選ぶ。

DRCSOCが初めから多種多様な食物を植えるように村人を指導するのではなく、上記のような分析を村人で行なった結果、現在のような三十種類もの品種を混植する家庭菜園に至ったのだという。つまり、この村の家庭菜園は一年を通じて村人に取って「利」を生み出す場であり、村人は菜園には「利」があることを知っているからこそ、村人は実践し

例① 自然の力を「利」に変える家庭菜園



■村人の家庭菜園。虫除けのマリーゴールドの花とトマト、キュウリ、ナスなど30種類以上の野菜が混植されている。

んだの村人が自分の畑で最低三十種類以上の野菜を育てている(ちなみに、私の赴任地であるラオスでは平均して五〜七種類程度の野菜が植えられているのみである。一年を通じての収穫と

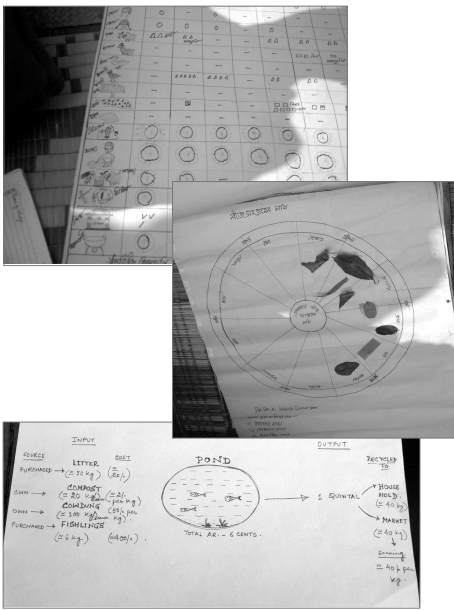
ているのだ。菜園から一度「利」を得た村人は必然的により利を得るにはどうしたら良いのか自分たちで頭を使って考えるようになり、結果、狭い土地でも工夫と想像力あふれた菜園が生み出されている。

■学び合う人々

村人たちの実践を促しているもう一つの要素が、グループピングとARTC (Area Resource Training Center) と呼ばれるDRCCSCのフィールドオフィスだ。グループピングとは、その名の通り活動を行なう際に個人ではなく十〜二十名程度のグループで実施する方法である。DRCCSCが活動する村では、村ごと、その活動の数だけグループがあり、「コメ銀行グループ、養鶏グループ、菜園グループなど」、村人は定期的にグループで相談会を開き、情報交換を行なうことができ、グループ内

が互いの学び合いの場となっている。また、ARTCはグループ内で解決できない問題が生じた時に村人が自由にアクセスできる場所に設置されており、DRCCSCのフィールドスタッフやより知識・経験のある村人と話し合える場として機能している。研修なども実施しており、地域のリソースセンタースとして果たしている意味は非常に大きい。

村人は自然から学び、またグループ内での付き合いを通じて隣人から学び、ARTCにアクセスすることで村では入手できない情報や技術を学ぶことも可能になる。「学び」が「実践」に活かされているその大きな具体例の一つがこの家庭菜園だと言うことができる。そして、何よりも印象的であったのは、菜園を実践する村人一人ひとりの楽しそうな顔だった。



■菜園にはどの野菜を植えるべきか。季節や植生、投入に応じての収穫などを図表で表わすなど、村人が自分たちの生活を振り返り、考え、自ら活動を選択できるようになるための工夫がたくさんある。一番下の図は、まん中の池を挟んで、左側にそこへの投入を、右側に投入に対して得られる収穫を並べた図。

例②「地域」を舞台に、子どもも大人も

■地域が「学び舎」になる

今回のインド訪問を通じて二つ目に感銘を受けたのは、DRCCSCが他の多くのNGOがそうであるように、通常自分たちのターゲット（多くの場合村とその村に住む大人たち）と呼ぶ人だけに活動の対象を限るのではなく、もっと広い概念、「地域」という枠組みの中で活動を展開している点だ。

環境教育の一環として学校と行なっている菜園や調査もその一つだ。DASSANGAYADHAM村にある小学校では、子どもたちが学校の敷地に自分たちの給食として食べる野菜を植えたり、また学校の周りにいる昆虫や植物・野菜の種をコレクションし、保存している。「次の世代になる子どもと働き、次世代を創っていくのもNGOの役割」だとチャタジー氏は言う。

子どもは虫を集め、自分たちで植えた野菜を観察することにより、どの虫がどの時期に多く、またどの虫はどの植物に影響を与えるのかなど、自然の摂理を知ることができる。学ぶ場とは学校だけではなく、森や田んぼなど、地域の中にあるすべての場所が可能なのだ。

インフォメーションセンターも地域を巻き込んだ活動の重要な要素となっている。これは、野菜や家畜、果樹、森林など村人に必要な書籍や

調査結果などが集めてある小さな図書館のようなものである。村人だけでなくその地域に住む学生や先生、お役人など、その地域にいる人すべてに利用されるように、人々が集まりやすい場所に設置されている。Dassangayadham郡のインフォメーションセンターは設立されてまだ十四カ月と新しいが、村のマーケットの中に設置されているという立地条件もあり、月に百人以上の人が訪れているそうだ。

今回のインド訪問を通じて数々の活動を見学したが、上記二つの事例に共通して、「地域」の中で「学び合い」の精神がすべての活動のベースとなっている、ということが確認できた。家庭菜園にしても、「利」を産み出す場としてだけでなく、村人どうしの学びの場、コミュニケーションの場としても機能している。「学ぶ」ということは、子どもだけに限らず人間にとつての喜びであり、そしてその喜びが物事を実践する力を生み、将来的には村人の自信を育てていく。そして、そのすべての過程は都会のトレーニングセンターに通って得られるものでなく、村人自身の地域の中で十分得ることができるものだ。

研修を受けての JVC ローカルスタッフの声



■菜園グループの集会に各国ローカルスタッフも参加させてもらった。

「記録」の大切さを学ぶ カンボジア事務所 環境教育担当 サイ・ボラ



今回の研修で初めて海外に行きました。最初は、最初に到着した大都市コルカタで気になったのは、市場などで働く女性がほとんどいなかったということです。そして、都市部での交通事情の悪さと凄まじい大気汚染にも驚きました。一方で農村部では、気候的にも地理的にもカンボジアよりも厳しい条件の中、農民たちは協力し合いながら生計を立てていました。ただ、今回訪問した村はカンボジアの農村に比べるとグローバリゼーションの影響はそれほど受けておらず、また、政府が土地なし貧困層に土地を支給するなど、NGOとしては関わりやすい環境であるとも感じました。

見学した活動の中では、特に植林の方法がカンボジアとは大きく違い参考になりました。政府が土地なし農民に対して灌漑用水路沿いへの植林を許可し、植えた木を土地なし農民が利用できるという方法で行なわれていたが、こうした制度はまだカンボジアでは見られません。また、カンボジアでは水路沿いなどに一列に植林するのが一般的ですが、インドでは二〜三列に様々な種類の木を植えていました。これにより、土手の土地浸食を止める作用が強まるだけではなく、用途に合わせていろいろな木が利用できるという利点があります。多くの種類の木があることでたくさんの鳥も集まってきました。今では木は大きく成長し、木陰に人も集まるようになりました。つまり、この森は人々の生活を支え、自然環境を豊かにし、人々の文化交流の場としても機能しています。

また、こうした植林活動は、農民の強い結束力と自己管理能力によって成り立っていました。DRCS Cの活動では、植林に限らずあらゆる活動で、農民グループや個々の農民が自らの活動状況や活動にかかる支出・収入などをきちんと記録しています。これによって農民は自分たちの状況を正確に把握することができ、また、その成果を他の人や次の世代にも伝えることができます。こうしたことが、農民の自信にもつながっていました。農民が自信を持ち、楽しんで活動を行なっている姿が印象的でした。

そのほかにも多くのことを今回の研修で学びましたが、今後自分が担当している環境教育のなかで、コンポストづくりや学校菜園、そして既に池のある学校ではそれを利用した菜園を紹介し、カンボジアでも活用できるか確かめたいと思います。また、地域の生態系や気候の情報を子どもたちが集めてチャートやグラフにするとといった取組みも紹介し、実践につなげたいと思います。

明るく活動する 女性に感銘 カンボジア事務所 フィールドスタッフ サム・ネアリー

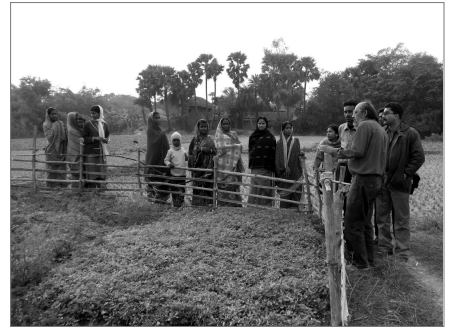


私はJVCカンボジア事務所のスタッフとしてこれまで三年間働いてきました。私はベトナム大学で農業を学んだ経験があり、また、以前働いていたNGOでもタイなどに研修に行なったことがあるため、初めての海外ではありませんでしたが、インドの農民の暮らしがりとそこで活動するNGOの姿は、私が想像しているものとは大きく違い、いろいろな学びがありました。

まず、DRCS Cでは、土地なし農民が主なプロジェクトの対象でした。農民が土地がないという状況のなかでも様々な工夫をこらしている。その一つが池を中心とした複合農業です。狭い土地の中に数十種類の野菜や果物などが植えられ、池では魚やアヒルが飼われています。また、家庭菜園は「栄養菜園」と呼ばれ、毎日の食事の栄養に配慮しながら、それぞれの作物の特性が考慮され狭い所に多くの品種の野菜が混植されていました。

また、農民同士の相互扶助関係も非常に成熟していました。池を掘って共同の菜園を持っている村をいくつか見学しましたが、政府や裕福な人が土地なし農民に土地を提供していることには驚かされました。今のカンボジアではあまり見られないことです。貧困農民の多いインドですが、こうした社会のシステムは非常に進んでいると感じました。

さらにDRCS Cの農業技術に対する取組み方も参考になりました。いろいろな種類の堆肥を作り、土壌を分析するなどしてきちんとその成果を確認したり、複合農業も単に様々な種類の植物を植えるのではなく、水がどれくらいあるのか、家畜の餌がどれくらい必要なのか、その家畜からどれくらいの堆肥が取れるのかなどをきちんと計算して農民にすすめています。その結果、多く



■農園の脇でチャタジー氏（右から2人目）から説明を受ける農民やJVCスタッフたち

の農民が様々な取組みを実践していました。DRCSCのスタッフの説明がわかりやすく納得いくものであるからこそ、農民も実践するのだと感じました。

今回の研修では、厳しい生活状況にありながらも明るく栄養菜園やグループ活動に取り組む女性たちの姿がとても印象的でした。限られた痩せた土地で生計を立てなければならぬインドの農民に比べれば、カンボジアの農民は比較的土地もあり恵まれています。カンボジアの女性たちもインドの女性たちのように楽しく自分たちの生活を改善していくことができるよう、私自身も農業や農村開発についての知識をさらに深め、村の人々のために働きたいと思っています。

印象的だった村人と スタッフの協力関係 ベトナム事務所 ホアビン事業アシスタント グエン・ティン・フオン

まず初めに、このような貴重な学ぶ機会を与えてくれたことに感



謝します。十日間の研修を終えて私自身、特に持続的農業について多くを学ぶことができました。また、DRCSCのスタッフの皆さんや対象地域の人々との交流を通じて、西ベンガルの農村の状況、プロジェクトの効果などを学ぶことができました。私たちが訪問した地域で行なわれていた活動は、私にとって非常に有意義なもので、持続的農業への理解をさらに深めるものとなりました。プロジェクトの実施方法は、対象地域の人々の生活へ戦略的にインパクトを与えようとするもので、極めて専門的かつ広範に及ぶものでした。特に印象に残った点を左に記します。

- 池とその周辺の使い方、種子銀行、コメ銀行、栄養を考慮した家庭菜園、リソースセンター
- 持続的農業を中心とした活動を実施する際に必要な詳細な記録とモニタリング
- 農民グループの作り方
- 中心となる農民の養成と地域のリソースセンターの役割

すべての活動において、村人とDRCSCスタッフの協力関係や実践方法が非常に印象的でした。また、すべての活動が村人の生活に非常によいインパクトを与えている点が素晴らしいと感じました。

特に、池の利用方法、コメ銀行、種子銀行、「コミュニティ・フォレスト」、そして地域のリソースセンターです。ベトナムとインドは気候やその他の条件が異なりますが、インドで学んだことをベトナムのホアビン事業に活かすのであれば、以下の点が可能だと考えています。

- 個々の世帯が小さな池を掘り、活用すること
- 貧困層の人々を対象としたコメ銀行
- 種子銀行、複合農業、栄養を考慮した家庭菜園の充実と教材の開発・活用
- 明確で戦略的なプロジェクト目標
- 記録の充実とモニタリング強化
- 各村で中心となる村人の養成

私が今回の研修で得た知識や経験を今後、生態系・経済面・社会面に配慮した農業を実践し、生活改善を図る村人のために役立てていきたいです。また、同僚にも今回、学んだことをしっかりと伝えていきたいです。

「豊かな自然」の 大切さを再認識 ラオス事務所 農村開発担当 ファンパン・センチャント



JVC
ラオスと
比較する
と、DRC
SCはと
ても大き
な団体で
す。それぞれの区やそしてエリアにもスタッフが配置されており、村人のニーズにすぐに対応することが可能です。また、菜園、家畜などの活動を進めるにもグループ単位で行なっていることが特に印象的でした。村人同士の学び合いや広がりが大きいのという意味でグループで活動することの意味は大きいと思います。

私の国ラオスにはまだ沢山の自然が残っています。人々は懸命に農業をしなくとも、ある意味生き延びることができます。今回訪れたインドの村の人々は残念ながら農業しか生きる選択肢がないように思いました。村に森はなく、家を建てる木も、また自分たちが食べる林産物もありません。彼らの生活は一〇〇％農業に依存している

ように思えました。

これに比べ、ラオスの村人は農業以外にも生きる選択肢がありません。農作物の育ちが悪い時には森の食べ物を食べ、また自然災害の際には森の作物を売り現金を得ることも可能です。

インドの村人は農業しか選択肢がないからこそ、その農業技術にはすばらしい工夫が見られるのだと思います。彼らは土壌の改善の仕方を知っているし、菜園をデザインすることの大切さや、虫除けの工夫を知っています。

インドの村と比較すると、ラオスの村は豊かです。しかしながら、それはその豊かな自然が永遠に続くという意味ではありません。私たちが今享受している自然の恵みは経済開発、経済成長に伴う企業や工場の進出により失われていくでしょう。将来的にはラオスの村も私が見てきたインドの村のようになる日も来るかもしれません。

今回の研修で学んだ自然と調和した農業というのは、私たちラオス人にとって自然を失わないための一つの選択肢ではないかと感じました。今後村の中に元々存在する自然農業の技術を利用したり、また自然を守っていくことの大切さを村人と話し合っていきたいと思います。

なぜなら、そうすることがラオ

スの自然、ラオスの将来を守ることにつながるからです。また、村人と一緒に現状を分析すること、自分たちの問題はどこから来ているのか、内からきているのか、また外

から来ているのか、そのインパクトを考え解決法を考えていくこともしていきたいと思います。インドで学んだグループ活動や、家庭菜園、堆肥なども取り入れていき

たいと思います。

農民と共に考え、実践する

カンボジア事務所 農村開発担当 山崎 勝



■プロフィール
大学在学中に農業に関心を持ち、アジア学院で農業について学ぶ。その後、他NGOでカンボジアに農業ディレクターとして赴任。〇三年八月より現職。

今回訪問したDRCSの代表であるチャタジー氏には多数の執筆がある。そこには、農業やコミュニティ開発に関する様々なアイデアが描かれている。今回、私たちが最も驚いたことは、そうしたアイデアのすべてが農民によって実践されているということであった。それは、彼がただのアイデアマンではなく、実践者であることを示している。

チャタジー氏は自ら農村を歩き、様々な農民の取組みや課題を直接農民から聞いている。そうして農民と共に考え出されたアイデアはどれも実践可能である。一方、多くのコミュニティ開発プロジェクトでは外部者の理念と農民の実践が乖離してしまっている。例えば、「参加型」や「環境保全型」と

いう考え方が多くのプロジェクトで採用されているが、必ずしも農民の関心がそこにあるわけではなく、どれくらいの期間でどんな利益を得ることができるのかをより重視する農民も多い。

では、なぜ同様の考え方を採用しているDRCSの取組みは農民に受け入れられているのだろうか。農民が実践可能な方法を模索するために、今回の研修でチャタジー氏が強調していたのは、「環境」・「経済」・「文化」の三つの視点を持つことである。例えば、今回訪問した地域ではヤギを飼っている農家が多かったが、一部の人々を除いてヤギを食べる習慣がないカンボジアでは、仮にヤギを取り入れた営農システムが環境的、経済的に優れていたとしても、文化的

な相違から農民はこの営農システムを導入しない可能性がある。このように、「環境」・「経済」・「文化」の三つの視点はどれか一つでも欠けていけば、良い結果を期待することはできない。

◎

今回の研修では、農民と外部者が協力し、三つの視点から農村の状況を分析し、問題の解決や生活の改善を進めている多くの実践例を見ることができた。JVCの現在の活動についても、JVCの理念や方法論を掲げることと同時に、研修で学んだこれらの視点を活かしてそれぞれの村の状況や活動の内容をもう一度分析して、それが農民の実践につながっているか、ひいては彼らの生活に資することにつながるかを見直していきたい。



ラオス活動村訪問記

川で水浴、板の間に雑魚寝。 村での活動はワイルドです！

毎週水曜日の夜、JVC東京事務所で書き損じハガキの仕分けをしてくれているラオスボランティアチーム。その重鎮である榎崎さんが、昨年夏に初めてJVCラオスのカムアンの活動村を訪れてくれました。『「分かっていたつもり」の村の生活も、見ると聞くとは大違い。大変な環境で平然と活動するスタッフに感動した1泊2日でした』とのこと。 (編集部)

「今日の活動村訪問ですが、道路状況が悪いので村に泊まることになりそうなのですが、大丈夫ですか？」

JVCカムアンの新井綾香さんから、ゲストハウスに電話があったのは朝の七時ごろ。村の生活を知りたい私に異論があるはずもない。電話を切って気がついた。前夜はカムアン日本人会の合同歓迎会で、午後九時ごろまで、一緒にお酒を飲んでいった。情報を仕入れたのは、あれから事務所へ帰ってから？ それとも今朝？ 日本人会についても総勢三人、それが首都・ヴィエンチャンから六時間余り、カムアン県の県庁所在地タケークに住む全在留邦人だった。

旅の始まりは、食料の買出し

村へのドライブの始まりは市場での買い物だ。一泊二日の小旅行といっても、目的地には食堂も売店もなく、自分たちが食べるものを持参しなくてはならない。市場には野菜、魚の定番のほかに、カエル、虫、リスのような小動物など、ご当地食材も並ぶ。

次はラオスのお役人のピックアップ。村の活動には、県と郡の担当者各一人を同行するのが決まりだ。新井さん、ラオス人

スタッフ二人、運転手、お役人二人、そして私の七人を乗せると、小さな四輪駆動車は、前列に三人乗っても満員、県の男性担当者は、後部の臨時座席に座った。

南北に走るラオスの大幹線・国道十三号から真東へ、ベトナム中部に向かう国道一号は、タケークの街を出ると、すぐに舗装が切れる。碎石が敷いてはあっている。その道を車は時速六十キロで飛ばす。途中、村人が道路脇に出した小店に寄って食べものを追加し、タケークから約一時間、日本でも問題になったナムトゥン2ダムの工事現場に行く道が分かれる地点に着いた。

ここから国境の山に向かう国道一号は、なぜか舗装されている。ベトナムの援助だろうか、と想像する。舗装道を行くのは束の間で、活動村に向かう側道に入ると、間もなく四輪駆動でも進まなくなる。赤土を盛っただけの雨季の道は、大木を満載した大型タンクが通ったとかで、泥沼のようだ。

動かなくなった車を捨て（運転手はそこで待機）、耕運機にひかれた荷車に乗り換える。運転手は少しでも固いところを探して耕運機を激しく振る。野趣



■ 榑崎 知行
(ならさき・ともゆき)

57歳、会社員。1990年代は広報（“AG”という署名で）、以後はラオスの分野を中心に、市民ボランティアとして長くJVCに関わっている。



■ 幼苗一本植えの水田を見る新井さん（左から2人目）とラオス人スタッフ、郡のお役人

に富んで楽しいドライブだが、時速は十キロもでない。やがて、その荷車も進まなくなり、荷台から降り、歩いたり、押したり、また乗ったり、で進む。タケノコから二時間余りで、対象村に着いた。

川の水浴は、足首まで泥の中

対象村はメコン川の支流沿いの丘の上、約二十戸の小村。電気は来ているが、使われているのは電灯だけで、ほかの電気器具はない。その電灯もない家が三戸あるとか。水道どころか井戸もなく、水は近くのメコンが川の支流から汲んでいる。JVCは周囲数村と一緒に、生活改善活動に取り組んでいる。具体的には、効率的な水田作り（幼苗一本植え）、果樹栽培などの指導だ。

あわただしく作った昼食をとったあと、午後は接ぎ木、取り木（枝から根を生やさせて苗にする）などの果樹栽培技術の研修、幼苗一本植えの水田、学習会の復習会などを見学して過ごす。

夕方近づいたころ、新井さんに水浴を誘われた。柄にもなく照れるが、好奇心が勝って一緒に川にでかける。赤土が露出した岸から、濁った流れに入る。足首まで川床に埋まっている。

る。新井さんは「大きなスカート」を胸元まで上げて、体を洗っている。上半身裸になった私は、ザンブリ頭まで川につかる。思いのほか水は冷たい。宿泊所の村長の家に戻り、足を洗い、風に当たってさっぱりすると、冷たいビールが欲しくなるが、冷蔵庫はない。

食事は数人ずつに分かれて、中央に置いた料理を素手で食べる。誰も手を洗う様子がないので、スポンで手をぬぐって食べ始める。手を洗う水は、食後に回ってきた。

夜は、日本で言えば五十畳くらいの板敷きの部屋で雑魚寝。部屋の半分弱がカーテンで仕切った家族が寝るスペースで、寝具は昼間も敷きっぱなし。残り三十畳分くらいが、集會場、食堂、客用寢室に使われている。広間に小さな蚊帳をいくつか張り、二人ずつ入って寝た。電灯が部屋に一つしかないだけに、寝る前はオシッコに行かざるを得ない。懐中電灯を持って出た家の外の闇は深い。長い雨季で干す機会もないのだから、寝具はジットリ湿っている。

身の危険を感じた舟での移動

村の朝は賑やかだ。放牧地向かう牛の首の鐘、足踏み式の精米機で米をつく音が、薄明の

ころから響いてくる。昼間はグツタリ寝てばかりいる犬も、元氣一杯、走り回っている。朝食の準備は、川への水を汲みから始まる。

二日目の午前中は新井さんとともに、タケノコ採りに連れて行ってもらった。村から一時間、水田、冠水した草原、焼畑跡地の牧草地の先の山が目的地だ。急傾斜の山の斜面を登ったり降りたりしながらタケノコを採る。村の女性たちは、素足にサンダルで軽やかに歩く。途中で、黄色いキノコの一団を見つけて、女性たちは歓声を上げた。タケノコと一緒に煮ると美味しいダシが出るとか。二時間余のタケノコ採りに疲れてしまい、昼食前に一眠りしてしまった。

昼食には、放し飼いの小さな鶏二羽を、つぶしてもらった。冷蔵庫のない村では、肉や魚は、丸一日は持たないだろう。ラオスで魚の塩漬を味付けに多用するのは、こんな理由もあるだろう。

つぶした鶏で開いた私のためのバーシー（食事を伴うラオス独特の儀式）に、村人など三十人が集まってくれた。村での鶏の飼育数は多い家でも二十羽、なかなか食べられるものではないらしく、人々の顔がにこやか

だ。キノコと煮たタケノコは、水煮のような淡泊な味だった。午後は舟に乗って、近くの二つの村を回る。前夜、水浴をした場所から乗った舟は定員一杯。船べりから水面まで約十五センチ、移動中、ずっと身の危険を感じていた。幼苗一本植えの実証水田などを見学、無事、昨日、車を捨てた場所までたどり着いた。

暮らすところから始まる活動

今回の訪問で一番印象的だったのは、新井さんの平静さだ。普通の女の子なら「ワーツ」とか「キヤーツ」とか言いそうな場面でも、さりげなく村人に溶け込んでいた。

友人、知人がほとんどいない、娯楽も少ない小さな街を受け入れて暮らすことから、村落開発の協力は始まるのだろう。他愛ないおしゃべりや、ささやかな買ひものを楽しみ、家事など日常生活を組み立てることに長けた女性のほうが、この場には向いているのかもしれない。そんなことも思いながら、百年近く前が最盛期だった街で、メコンに向かって一人ビールを飲んだ。

食の安全？

パレスチナ事業担当

藤屋リカ

ベツレヘムの難民キャンプの刺繍グループの女性たちは、子育て、家事をしながら、懸命に刺繍の仕事をしています。食事の準備だけでも大変です。大家族で十人以上のことも多いのです。

「仕事で忙しいから」と私の食事の心配までしてくれます。みんな生活が苦しいのに、「食事の準備をするのは大変だから我が家で食べて行って」と声をかけてくれます。丁寧にお断りするのですが、どうしても断りきれず、難民キャンプで食べさせても

らうこともありました。

私が断るのはわかっていて、でも気にしてくれて「たくさん作っているから」と、「お持ち帰り」にしてくれることもあります。さすがにこれは断れません。深めのお皿に入った料理をアルミ箔でグルグル巻いてこばれないようにして、大切に持たせてくれるのです。

私は仕事を終え、夕食を抱えてエルサレムの事務所に帰るのですが、イスラエルが設置している巨大な検問所を越えなければなりません。検問所は空港とほとんど同じで、荷物はすべて物々しい金属探知機を通さなければなりません。勿論、大きな反応音が響きます。モニターには子どもおぼの頭ほどある金属の塊と思しきものが映っていることでしょう。私が



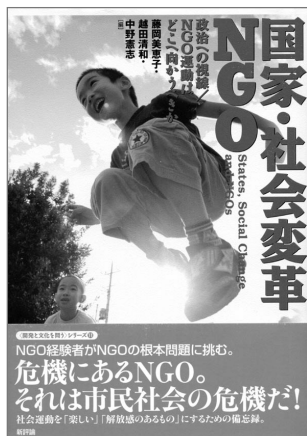
外国人だからか、不思議な金属反応を示す物体を開けてまで検査されたことはありません。

検問所を無事通過、バスに乗り換え、更に歩いて事務所に到着。自慢の家庭料理をありがたく味わい、女性たちの温かさをかみしめるのでした。

『国家・社会変革・NGO 政治への視線/NGO運動はどこへ向かうべきか』

みるよむきく

藤岡美恵子・越田清和・中野憲志編 新評論刊 3200円＋税



冷戦構造の終焉はNGOバブルをもたらし、レスター・ソロモンが「地球規模の連帯革命」という表現を使ったように、「市場の失敗」「政府の失敗」により、民間非営利セクターが地球規模で拡大した。人道支援・開発の分野においても、非常に多額の政府資金がNGOに流れこむことにより、NGOは大きな影響力を持つようになった。その結果、事業実施主体としての専門性が高まる一方で、政府との関係性に関する課題や、

「NGOが危機にある」という衝撃的な書き出しで始まる本書は、NGOの存在理由やその活動のあり方に危機感を抱いた編者二名（藤岡、越田）と執筆者（高橋）が二〇〇四年春から数回にわたって勉強会やシンポジウムを開催し、そこでの議論をもとにさらに数名の活動家や研究者を加えて執筆したものである。

社会変革を求める民衆運動からの乖離かいりなどが生じている。リスターの稿にもあるように、英国やオランダなどを中心に、九〇年代後半からNGOへの批判が高まるなか、NGOは、現場での政策提言活動と南の組織の「問題解決能力開発」へとシフトしていくが、政策決定プロセスに関わる正統性や、NGO自身の説明責任、透明性などあらたな疑問が投げられるようになる。

更に、二〇〇一年以降の「テロとの戦い」により、政治、軍事、平和構築、人道支援・開発の境界がますます曖昧あいまいになっている。日本では、事業実施に特化して政治的な立場をとらないとするNGOが多いが、すでにこのような状況下では「非政治性」を貫くことはむずかしくなりつつある。

しかしながら、日本ではNGOの国家や国際社会との関係性や、その存在意義について、あまり議論がされてこなかったように思う。本書が、NGO関係者だけでなくより多くの人がここに提示されている問題意識を共有し、幅広い議論を行なうことで、NGOの存在意義を問い直すきっかけになることを願う。

（CSOネットワーク 黒田かをり）



タイ

■スマトラ島沖津波

被災地支援

スマトラ島沖地震による津波によって被災したタイ南部6県を対象に復興支援を実施。被災した在タイビルマ労働者の子どもや教師への健康教育、ビルマ人遺族への遺体返還と遺族への調査活動を通じた政策キャンペーンを継続している。12月26日には津波後2年の追悼式イベントが各地で開催され、漁を本格的に再開したが新しく調達した船や漁具代を今後コミュニティに返済していかなければならない小規模漁民被災者や、いまだに遺体返してもらえず苦痛を強いられている在タイビルマ人遺族やタイ人被災者などに聞き取りを行なった。(堤)

■交流・ネットワーク

05年度で終了した東北タイでの活動のその後の動向を追うことを目的に、関係者との交流を続けている。東北タイの活動でも協力してきたタイの地元NGOの代表の方が日本の農の取組みを学ぶために来日している。JVCは、国内で協力して頂いている日本の有機・自然農家の方を紹介しアテンドに協力した。

(下田)



■追悼記念塔の前に合掌する在タイビルマ人遺族(12月26日追悼式典にて)

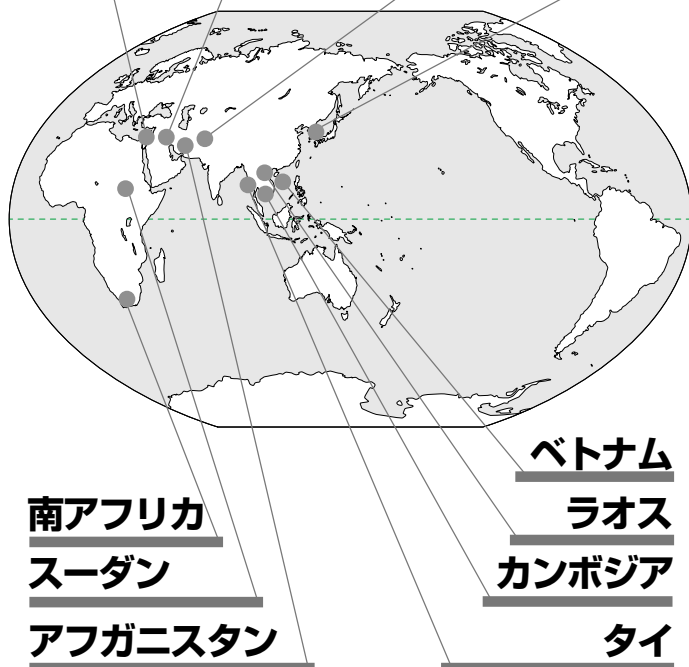
JVCは、現在11の国/地域で活動しています。

イラク

パレスチナ

パキスタン

コリア



南アフリカ

スーダン

アフガニスタン

ベトナム

ラオス

カンボジア

タイ



ベトナム

■農村開発(ホアビン省)

04年から実施している延長期は07年3月に終了するため、1月末に3年間の成果と課題を村人、村づくり委員会、そしてカウンターパート

であるタンラック郡人民委員会と共に確認し、今後の活動改善に役立てていくための評価会合を行なう予定。JVCスタッフが中心となり、評価活動を開始した。グループディスカッションやインタビューを通じて村人がどのようにプロジェクトの影響について考えているのかをまとめ、報告書を作成している。JVCスタッフにとっても様々な学びがあった。(伊能)

■自然資源管理(ソンラ省)

04年から3年間の予定の第2フェーズが07年3月に終了する。07年1月にコマ村の村人たちとカウンターパートのトゥアンチャウ郡行政と共に活動を振り返り、成果と課題を明らかにするための評価会合を開催した。コマ村のフモン民族の女性は「将来、子どもたちが安心して村で暮らしていくことができるように堆肥作成技術や等高線農業を続けていきたい」と話した。今後もコマ村の村人と対話の場を持ち続けていく。(伊能)



■「3年間でどんなことが達成？」スタッフから村人へインタビュー。



カンボジア

■持続的農業と農村開発(SARD)

安全な水や食糧の確保をめざして94年から活動。カンダール県での活動の最終評価に向け、グループ活動の調査。シエムリアップ県20村で調査と研修継続。代表農民を農民協会の全国組織「農民自然ネットワーク(FNN)」年次総会と有機農産物キャンペーンに派遣。環境教育の教員手引書案を作成。インドでスタッフ研修。(米倉)

シエムリアップ県20村で調査と研修継続。代表農民を農民協会の全国組織「農民自然ネットワーク(FNN)」年次総会と有機農産物キャンペーンに派遣。環境教育の教員手引書案を作成。インドでスタッフ研修。(米倉)

■資料・情報センター(TRC)

持続的農業、農村開発の資料を95年から提供。農村部への展開をめざし、プレイヴェン県とカンダール県の農民協会との連携を協議。(米倉)

■技術学校

ブノンペンで自動車修理の職業訓練校・寮と付設整備工場の運営強化。移転先で11月から建設工事が開始。(米倉)

■調査研究・政策提言、ネットワーク

人権デーに参加。在カンボジアNGO日本人ネットワーク(JNNG)でバタンバン地雷除去活動などを視察。(米倉)



■有機農産物キャンペーンで販売！シエムリアップの街でもアピール。

アフガニスタン

■女性と子どもの健康改善 支援(ナンガルハル県)

◎診療所支援：医療スタッフの評価を実施し、安全で質量ともに適正な薬品提供に資するための調整を、地域住民の理解を得ながら進めている。12月に母子保健担当の助産師をJICA/保健省の実務研修に派遣。

◎伝統産婆の職能向上研修：伝統産婆19人に対し、JVCの助産師、地域保健員研修担当と産婆担当のトレーナーの合同チームによる集中定期研修(2日間)を実施した。ホギヤ二郡の1集合村でも1月下旬に同様の研修を行なう。(本間)

■教育支援(ナンガルハル県シェワ郡)

県およびシェワ郡の教育局と協力し、同郡の男子校と女子校で1～3学年を担当している教師70名を対象とした1年生の教科書指導法ワークショップを準備中。1月下旬から11日間実施する。(本間)

■政策提言・ネットワーク

日本政府がアフガニスタンにおいてNATOとの連携強化を発表したことを受け、NGOネットワーク内で紛争地における軍民関係の問題点について意見交換を行なった。(長谷部)



■小学校1年生、はじめての教科書。

ラオス

■森林保全

村人の生活を支える森を守る活動を行なっている。村の共有林を正式に登録する「土地森林委譲」を行政とともに実施している。

今年は6村で行なう予定。

森の中の木や林産物を取るために他の村が侵入してくるなど、村と村の間の問題が多発している。また、6月に配布したラタン(藤)の苗は乾季の水不足にも負けず、順調に成長しており、寒さやシロアリ被害で多少の枯死が出ているが、生存率は92%と高い。今年の4月には最初の収穫をむかえる。(新井)

■複合農業・生活改善

十分な食料を確保するため、稲作改善・家庭菜園を行なっている。収穫前にコメ不足となることから、コメ銀行を設立し安定してコメが得られるようにしている。10～11月の収穫で無事返却することができた。

また、新たにコメ銀行を設立する村で利点・欠点などを考えるワークショップを開催した。乾季の稲作として幼苗一本植(SRI)を2村で実施した。堆肥や液肥の研修も行ない、使用した。現在のところ雑草も少なく、順調に育っている。(新井)



■ドンドゥー村の田植えでは、新しい技術に関心を持った多くの村人が集まった。

パキスタン

■大地震被災地支援

被災地は2度目の冬の真っ只中である。バタグラムではあちらこちらで住宅再建の槌音は聞かれるものの、この冬もテントや仮設住宅で越す人もまだまだ多い。いまだに様々な団体が毛布、薪ストーブ、衣類、衛生キット等の配布を行なっている。公共建築物(学校・病院等)はテントからプレハブにはなったが、本格的な建設はまだこれからである。電気は比較的早く復旧はしたものの、いまだに安定していない。水供給システムの復旧は国際NGO、地元NGO等様々な団体に関わり、8、9割完成したといったところである。

JVCのパキスタン地震被災者支援事業(緊急支援)は、この1月末で終了した。07年1月14日の時点で家庭用トイレは1,153基を設置し、学校トイレは70カ所で完成し、衛生指導小集会の参加者は延べ12,929人に達した。(安野)

●今までご支援いただきましてありがとうございました。



■「上手に書けたよ！」設置したトイレを描いてくれた小学生たち。

南アフリカ

■環境保全型農業 (東ケープ州)

安定した食料生産と農村地域の復興を目指し、環境保全型農業の研修と普及を実施。昨年7月の活動評価を経て、実践を深めた篤農家が村の中でリーダーとなり、普及に取り組んでいる。例年より雨が少なくメイズ(トウモロコシ)の作付けが遅れたが、12月には終了。以前はメイズを栽培しない時期は休耕にしていた畑で、冬作物の小麦やオーツを栽培する人が増えた。年間を通して栽培することで土が固くならず耕作が容易になり、メイズの成長も早い。1月には畑のモニタリングと篤農家ミーティングを実施した。(津山)

■HIV/エイズ(リンボボ州)

感染予防、在宅介護、HIV陽性者およびエイズで親を亡くした遺児への支援。在宅介護ボランティアへの研修を継続して実施。また、家庭菜園研修の参加者が、多様な野菜やハーブを栽培するようになり、自給が可能になっただけでなく、病人や孤児に新鮮な野菜を届ける人も出てきた。「モリンガ」という木の葉は、免疫力を高める効果があり、苗木を配布している。(青木)



■家庭菜園の研修で課題を話し合う。

イラク

■ガン・白血病医療支援

◎病院への医薬品提供：JIM-NETとの連携で医薬品提供を継続中。バグダッドの治安の悪化が支援先の病院の医師の治療活動にも影響を及ぼし

ており、外来患者が10月以前の半分以下に減少している他、医師の通勤にも差し支えが生じている。そのような状況下でも懸命な治療が継続しているので、引き続き支援を続ける。(原)

◎政策提言：小児ガンの治療薬の供給状況に関する報告書を10月末にまとめ、これをもとに医薬品供給の改善策を取るよう訴える提言活動を始めた。その後も悪化する治安状況を顧み、「イラク緊急事態」に対し、難民支援をも含む現地の緊急支援ニーズに合った対策を取るようとの日本政府への提言書を作成した。この提言書は他の参加団体の賛同を得て、JIM-NETとして12月18日に外務省に提出し、記者会見を行ない発表した。

また、1月10日に行なわれたブッシュ米国大統領によるイラク新政策の発表を受けて、米軍の増派という決定が更なる衝突の激化を生み、人道的な危機をもたらす懸念を表明する声明を1月13日に発表した。(原)



■ JVC 代表谷山より岩屋外務副大臣に提言書を手渡す。

パレスチナ

■ガザ緊急支援

ガザ NGO による栄養失調児への栄養食提供と栄養指導の支援。11月からは栄養センターに通う子どもたちの栄養状態の改善が進む。3月までの支援継続を決定。(小林)

■幼稚園児栄養改善支援

ガザ地区で牛乳とビスケットを園児500人に提供。12月から幼稚園の先生に対しての栄養・保健衛生ワークショップ実施。11月に栄養診断・貧血検査を限定校にて実施。(小林)

■トラウマ（心的外傷）を持つ子どもたち治療支援

ベツレヘムの特別学校での言語・音楽療法を支援。ダンスを取り入れた音楽療法は子どもたちにも人気。(小林)

■子どもの文化・教育支援

ベツレヘムの難民キャンプのハンダラ文化センターを支援。女性グループの刺繍製品プロジェクトでは、順調に増加する注文に対応するため新しい縫製担当を研修中。(小林)

■巡回診療支援

エルサレムの医療 NGO による巡回診療・保健指導を支援。(小林)



■ガザの栄養センターに通り元気になったドリアちゃんとお母さん。

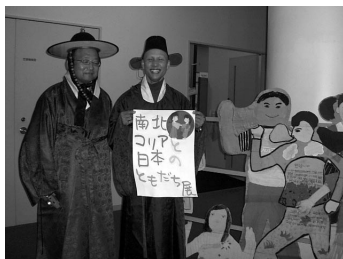
コリア

■絵画交流（国内巡回展）

引き続き、韓国・日本・北朝鮮の子どもたちによる絵画展「南北コリアと日本のともだち展」の国内巡回展が行なわれている。

11月は愛媛県松山市、12月には福岡市、埼玉県さいたま市、1月には神奈川県茅ヶ崎市で開催された。さいたま展の会場となった「プラザイースト」では、開催期間中にコリア・クイズウォークラリーや、サムルノリ（農楽）演奏などが同時に行なわれ、多くの子どもたちでにぎわった。

10月に北朝鮮で行なわれた核実験実施の報道以降、国内での北朝鮮に対する視線は厳しく、後援名義の取得や入場者数にも影響が出ているところもあるが、各地の主催者は「日朝間が断絶されているからこそ、市民がつながれ、続けていくことに意味がある」と話している。(寺西)



■朝鮮通信使の衣装で登場した「さいたま展」参加者。

スーダン

■帰還難民支援

（スーダン南部）

採用した研修生に1名欠員が出て、新たに2名面接し女性を1名採用した。計10名の研修生（内、女性2名）を対象に、トレーニングを実施している。これまでは実地研修が中心だったが、12月から講義を開始した。一方で難民の帰還を推進するUNHCRの車両整備を実施しているが、今年度購入を予定していた工場用機材でタイヤ交換機、高圧洗浄機などを隣国ケニアから調達した。(岩間)

■井戸づくり支援（ダルフル）

協力団体「イスラミック・リリーフ」により、西ダルフル州の州都近郊の3村で設置された井戸及びハンドポンプを視察するため、2月に岩間がダルフルへ出張の予定である。州都のジェニーナまでは行ける予定だが、近郊の3村へは現地の治安状況を見ながら、訪問の可否を判断する。(岩間)



■手工具置き場を改造した教室で、研修生に講義する井谷（右端）。

第20回 (12月20日)

エイズ入門

ワークショップ

講師：南アフリカ事業担当 渡辺 直子
＋開発教育ボランティアチーム

第21回 (1月24日)

この地で生きる

アフリカ農村からの気づきからアジア、日本へ

講師：事務局次長 壽賀 一仁

HIV／エイズが世界中に広がる今、HIV陽性者の六〇％がアフリカで生活しています。なぜアフリカにHIV陽性者が多いのでしょうか。南アフリカ共和国を例に、アフリカに広がるHIV／エイズの状況をいっしょに考えるために、ワークショップを行いました。

まず写真を見ながら南アフリカの格差社会の状況を把握し、簡単なクイズでHIVとエイズの違いなどを理解しました。これで基本的な知識を確認した

後、グループに分かれて「なぜ南アフリカではHIV陽性者が多いのか」、続いて「HIV／エイズの状況に対して何ができるのか？」について考えを出し合いました。

「原因」としては「農村に職がなく出稼ぎが多いこと」、「薬が手に入らないこと」などの意見が出ました。また、講師の解説から、HIV／エイズの感染拡大には様々な要因が絡み合っていること、また「性感染症」という側面だけが強

調されていることから、差別や偏見が強くなり感染拡大につながっていることもわかりました。「対策」としては、「正しい知識を身につけるための教育」、「検査の義務化」、「出稼ぎなしで村で生活できるように職を与える」などの意見が出されました。しかし、知識が身についても差別や解雇などの社会状況への恐怖心から効果がない場合が多いことなど、実際の状況についても補足がありました。

(広報インターン 青木 寛子)

国内ひろば

JVC network

少雨や干ばつ、洪水にしばしば襲われる厳しい環境のなかでも、アフリカの農民は昔から自立した暮らしを営んできました。その暮らしとはどのようなものなのでしょうか。また、私たちNGO「よそ者」はどのように関わっているのでしょうか。JVCスタッフとして、また個人としても長くアフリカに関わってきた壽賀が、肌で感じた農村の暮らしをお話ししました。

■農民は農業だけで暮らしてはいない

農村という言葉からは、村で定住し、自給自足の生活を

営んでいる様子を想像しがちです。しかし、アフリカの場合、農業だけで生計をたてているわけではありません。野生の果物や昆虫を採集し、牧畜を営み、出稼ぎや行商にも出かけています。また、スーパーや雑貨屋でパンやお茶、砂糖を購入するのも普通のことです。つまり、私たちと同じく貨幣経済のなかで暮らしが成り立っているのです。

■「よそ者」の視線を利用

もともと自立している人々を自立させる援助は必要ないでしょう。しかし、「よそ者」の関わりによって、それまで見落とされてきた自然資源や伝

統的な技能が明らかになることがあります。そうした再発見と再考や工夫は日々の暮らしを強くすることにつながります。「よそ者」の視線から日常の暮らしのプロセスを強く豊かにすることに貢献することが重要なのです。

参加した方々は農業を実践されている方が多く、講座が終わった後も会場に残って意見交換が続いていました。内容のダイジェストをJVCホームページに掲載しておりますので、ぜひご覧ください。

(広報インターン 櫻井 愛)

募金にご協力ありがとうございます

JVCの活動は、皆さまの募金に支えられています。
JVCへの募金は税の優遇措置を受けることができます。

① JVC 募金

JVCの各国での活動に役立てられます。募金先をご指定いただくこともできます。

口座番号：00190-9-27495

加入者名：JVC 東京事務所

11月計 829,257 円

12月計 3,351,896 円

	11月	12月
無指定	395,837 円	686,251 円
タイ	5,000 円	43,000 円
(津波被害)	0 円	53,000 円
カンボジア	6,000 円	141,000 円
ラオス	1,000 円	254,001 円
ベトナム	21,000 円	35,500 円
南アフリカ	61,727 円	576,500 円
パレスチナ	123,524 円	443,739 円
アフガニスタン	31,439 円	512,322 円
コリア	3,000 円	42,000 円
イラク	180,730 円	386,583 円
スーダン	0 円	168,000 円
パキスタン地震	0 円	10,000 円

② 犬養道子「みどり一本」募金

JVC活動地での環境保全活動に使われます。

口座番号：00100-8-212497

加入者名：犬養道子「みどり一本」

11月計 191,300 円 / 25 件

12月計 494,946 円 / 41 件

③ JVC マンスリー募金

銀行や郵便局の口座からの自動引き落としを利用する手軽な募金方法です。

11月計 1,237,200 円 / 1,098 件

12月計 1,224,700 円 / 1,099 件

編集後記

会議、ホームページ打ち合わせ、現地活動資料読みこみ、それへのコメント作成、会議、勉強会出席、インターン募集の広報、応募者対応、認定NPO申請のための募金リスト出力、会議、リストのチェック依頼、その確認、経過報告、会議、ホームページ作りこみ、その公開、会議、T&E原稿催促、グラ確認、校正、帰国者お疲れ様会、出張者へのPC準備、会議…。新年早々頑張っている皆様、お互いお疲れ様です…(H)

JVC国際協力コンサート2006 公演終了しました

東京公演

大阪公演

『クリスマス・オラトリオ』

『メサイア』



大阪・東京両公演あわせて二千四百名以上の方にご来場いただきました。豪州からソリストを招聘、東京公演での『クリスマス・オラトリオ』演奏、会場での豪州ワインプレゼント…初物づくしでした。JVCスタッフは、この公演の日、演奏のすばらしさと、支えてくださる方々の存在に大いに励まされます。

～会場アンケートより～

◎毎年このコンサートで一年の無事を感謝し、幸せなクリスマスの気分を味わっている。

◎平和を祈りつつ、聴きました。ボランティアのすごさを感じました。

◎音楽で人助けができるなら、と思って来ましたが、すてきな年末のイベントとなりよかったです。

(JVCコンサート事務局 石川 朋子)

今年の東京公演(十二月九日(日))の歌声ボランティアを募集しています。詳しくは事務局まで。

JVC国際協力カレンダー2007 アジア育ち



おかげさまで
21,500 部

毎年製作しているJVC国際協力カレンダー。二〇〇七年「アジア育ち」は、おかげさまで、二万一千五百部ほどのご注文をいただきました。ご友人やご親戚への暮れのご挨拶にもご利用いただいています。今年も、自分たちのグループで「アフガニスタンの井戸一本の費用を捻出しよう!」と周辺の方々にも声をかけて申し込んでくださるグループもあり、ありがたいと同時にこちらが励まされる思いでした。

来年は、写真家・小松義夫氏にご協力いただいて、世界の生活写真をお届けします。住む、使う、食べる、装

う、作る、耕す…小松氏は世界中を歩きながら、人々の暮らしを撮影してまわっています。日本に居ながらにして未知の人々に出会えるカレンダー。引き続きのご利用をお待ちしております。

(カレンダー事務局 荻野 洋子)

会員専用ページパスワード (3~4月) →→→

U9nmwSKD2p

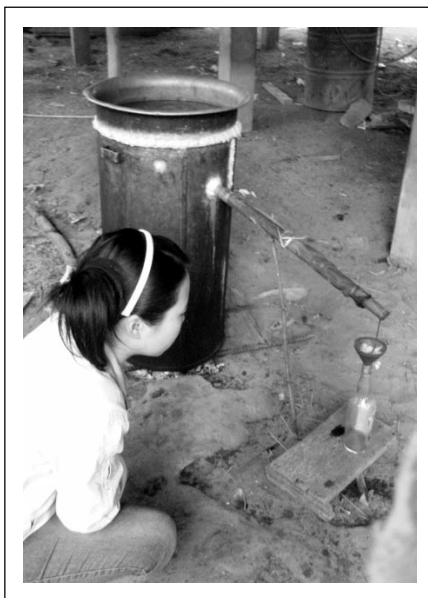
※ JVC ホームページの会員専用ページでは、T&Eのバックナンバーを順次公開中です。現在、この作業を手伝って下さる方を募集中。細野までご連絡を!

暮らしを彩る道具

LIFEWORk ITEMS

79

Laos



ラオラオづくり

ラオラオとは、ラオスの農村で作られる地酒のこと。製法は日本の米焼酎と基本的に同じだそう。ドラム缶の継ぎ目には麴(こうじ)がびっしりとついている。蒸留してできた原酒を綿でこして瓶に保存する。
(カムアン県ボラパー郡ナボー村で / ラオス事務所インターン濱まゆみ撮影)



日本国際ボランティアセンター (Japan International Volunteer Center) は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

■JVCでは会員を募集しています。

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年6回の会報誌と年次報告書をお届けします。

- ◎一般会員 10,000円
- ◎学生会員 5,000円
- ◎団体会員 30,000円

※それぞれに正会員と賛助会員があります。

入会のお申し込み、会員の方のメールマガジンのお申し込み、住所変更などは会員担当の寺西へ。

→ s-tera@ngo-jvc.net

会員数(2月5日現在) 合計 1,526人
(正会員 702人 賛助会員 824人)

■オリエンテーション(説明会)へお越しください。

JVCの活動内容をご紹介します。お気軽にご参加ください。
(無料。予約不要です)

第1月曜日 午後7:00 - 8:30

第2・第4土曜日 午後2:00 - 3:30

※会場はJVC東京事務所です。

■E-mail

info@ngo-jvc.net

■ホームページ

<http://www.ngo-jvc.net/>

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。
※本誌は再生紙を使用しています。